
ジェシータの楯

悠理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェシータの楯

【Nコード】

N8586Z

【作者名】

悠理

【あらすじ】

東京。一般の人間にはその存在が知れ渡っていない、政府の関係者や大財閥の人間しか知る事のない特殊SP機関『ジェシータ』。少年は世界最高峰の護衛機関に身を置く、史上最年少のメンバーの一人だった。

だがある日、少年は奇妙な出来事に遭遇し、『魔術』という新たな世界の法則に触れていく。

その先に見えるものは何か。少年はただ一つの楯としてそこに立つ。《これは作者の過去作品、『魔術記』のリメイク作品です》

プロローグ（前書き）

こんにちは、悠理です。

こちらの作品は以前公開していた『魔術記』という作品のリメイク作です。

設定の大幅変更がかなりありますが、前作から呼んでいただいている方はご容赦ください。

初めての方は今後ともよろしく願っています。

ブローグ

東京都港区芝公園。

1958年10月14日竣工、同年12月23日に完工式が開かれた東京の観光名所の一つとして知られる、東京タワー。正式名称は日本電波塔。

7月中旬、すでに真夏の猛暑に突入している蝉のうるさい今日の頃。

東京タワーの傍らにて正式な会場が設けられ、今そこは一つの応援演説会場と化していた。

政治家、さいとうふみたか齊藤史孝は約300人の支持者の前で小さなステージ上に立ち、マイク片手に現在の日本について、そして政治社会の現状について熱く語っている。大衆に向かって鼓舞、激昂できるその姿はさすがと言うべきか。支持率が高いだけの事はある、政治に興味のない自分でも思わず彼の話に耳を傾けてしまうほどであった。

『 ねえ、結城。結城ってば！ 人の話聞いてる！？ 』

……これは決して、齊藤氏の台詞ではない。

片耳に引っ掛けているイヤホンから女の子の叫び声が響いて、黒髪黒目、中肉中背の少年、すわべゆっき諏訪部結城の意識はようやく現実に取り戻された。

演説の上手い政治家というのはちょっと困らせられるな、と結城は半分呆れながら考える。大して興味のない話だったのに、聞いているだけで妙に引き込まれるというか、中毒性があるというか。いや

まあ、政治に興味がないのは確かだ。そんな無関係者の自分まで話の中に引き込むほど、あの斉藤史孝という中年太りのおっさんはよほど話が上手いのだろう。

『ちよつと結城！』

「ああ、ごめん。聞いてる聞いてる。……で、なんだっけ？」

『絶対に聞いてなかったでしょ……』

イヤホンの向こうで相手の女の子が溜息を吐いたのが何となく分かる。そんな面倒くさそうにされてもね。文句なら演説中の斉藤氏宛によろしく願います。

『……まあいいや。もう一度説明するから今度はちゃんと聞いててね』

「りょーかい」

通信相手の催促にま温い声で返す。

結城の軽い返事を聞いて相手の女の子は小さく咳払いをすると、

『今からスピーチが終盤に差し掛かって……せいぜい2分後ぐらいかな。この後は拍手会だから、ステージ周りにいるバリケード要員の警察がその場から離れることになってる。その時、ほんの数秒ぐらいだけ斉藤氏の周りが完全にノーガードになるの』

「……えーつと、つまり？」

『鈍いなあ。だからね？　もし犯人が斉藤氏の事を狙ってくるのな

ら、その数十秒が絶好のタイミングってこと』

「……ふむ」

大体の言いたい事を把握し、誰に向けてでもなくその場で頷く。結城のその反応を知ってか知らずしてか、少女は軽く息を吸って続けた。

『犯人の使うものが、ナイフか、拳銃か、それとも別の何かかは特定できないけど……おそらく今犯人のいる場所は結城から見て右手一番人だかりが多くて込みあってる場所だと思う』

少女の言葉に視線だけを右に向ける。

言われて気付くが、確かに。演説中の斉藤氏との距離が一番近い事もあってか、支持者たちの密集度をもっとも高い。自分の身を隠すのであればあの中に紛れる事がおそらく最良であろう。

『目視でも十分に分かるでしょ？ 結城のいる位置からだと飛び出すのに少し時間がかかるけど、大丈夫？』

「無理、とは答えられないだろう？ これでも一応仕事な訳だし」

イヤホンから届く声に小さく返しつつ、結城は移動を開始する。人の合間合間を縫うように移動して、上手い事人だかりの最前列に体をすべり込ませる。前に飛び出す際、少しでも早く飛びこめるように位置取りをしておかなければならない。

バリケード要員の警察と軽く目があつた。少し不審な視線を向けてくるが、結城の顔を見た途端に慌てて小さく一礼する。こういうのはあまり慣れてないんだけど……とりあえず結城も、首だけで礼を返す。

「綾羽^{あやは}。残り何秒？」

「ん。せいぜい30……いや、最後にシメがあるだろうから45秒ぐらいかな」

残りあと数十秒。ぼーっとしてればあつという間な時間である。

「……そろそろ、か。悪い、集中するから通信切るよ」

「え？　ちよつと」

」

相手の返答を待たず、結城はイヤホンのコードの先　ポケットから一見ただの音楽プレイヤーにしか見えない端末を取り出し、軽く操作してイヤホンごとポケットに突っ込み直す。通信をこつちから一方的に切断するのはいつもの事だ、特に向こうのご機嫌を損なう事はないだろう。

それからすぐ、斉藤氏が演説のシメらしき言葉を口にして、周囲の人達から次々と拍手が湧き上がった。斉藤氏自身も頭を何度も下げて、支持者たちの拍手に行動で返す。とりあえず周辺に溶け込まなきゃならない結城も拍手だけしておいた。

やがて司会の人らしき男性が前に出てきてマイクを手に持つと、

「それでは今から斉藤史孝の拍手会を行います。皆様は是非ともステージ上へどうぞ！」

その言葉を同時に、バリケード要員の警察達がステージ脇へと引っ込み始める。

……そろそろ問題の拍手会だ。未だ誰も前へ踏み出そうとしないが、警察の方が完全に身を退いたら一斉にゾロゾロと歩み寄り始め

るだろう。一体どのタイミングで犯行を行つつもりなのか、こればかりは自分自身の眼力に頼るしかない。

だが。

「……あ？」

だが、予想以上に。

予想以上に、それは早く訪れた。

結城が視線を向ける先 ステージ右手の人ばかりの中。未だ積極的に動こうとしていない人々の中を、ただ一人、両手をポケットに突っ込んで前進している男が視界の隅に映った。

（……まさか）

男は一気に最前列まで躍り出ると、死んだ魚のような目でステージ上に立つ斉藤氏を睨みつけている。ただチラ見する程度では分からないだろう。男の顔を凝視していた結城は、男の向けるその視線に明らかな殺意が混じっている事を見逃さなかった。

結城の中で思考が入れ替わる。

スイッチを切り替える。

「 ツー！！」

瞬間、その場で地面を思いっきり蹴り上げ、勢いよくその場から走り出す。

向かう先は男の元。だが一瞬判断が遅れたせいか、距離がやたらと遠く感じる。

男は上着のポケットに突っ込んでいた手を外に出し、その手中にあるもの おそらく『手榴弾』を取り出した。

(んなものどこで手に入れたんだよ……！！)

頭の中で毒づきつつも、一気に駆け抜ける。もし手榴弾なんかこんな街中で爆発したらただじゃ済まない。それを人に投げつけるつもりなのだ、斉藤氏みたいな中年のおっさん程度一撃で殺せてしまうレベルである。

男の手榴弾を持つ腕が振りかぶられる。周辺にいる数人の人々が彼の不審な動きに視線を向けているようだったが、ただの一般人である彼らに何か期待しても無駄なことだ。

だからこそ、結城がここにいるのである。

「させるかあ！！」

腹の底から声を張り上げ、間一髪、結城は男の体目掛けて全体重のタックルをお見舞いする。かはっ、と男が胃の中の空気を吐き出したのが分かる。

そのまま両腕の手首を拘束すると、完璧に動きを封じてコンクリートの地面へと容赦なく押し倒した。同時に、周囲にいる人々が戸惑い混じりにざわつき始める。所詮彼らはただの一般人、まだこの男がテロ犯だということに気付かず、学生らしき男の子がいきなり大人の男性にタックルをお見舞いした、程度にしか思っていないだろう。

「っ、手榴弾は！？」

今の一撃、倒れた際に頭でも打ったのか。すでに気絶している男の手　そこに、手榴弾がない。

慌てて上空に視線を向けると、ピンの抜かれた手榴弾が空を舞い、ステージの手前付近に落下する直前だった。

完全に爆発するまでおそらくあと数秒。

結城は齒を食いしぱり、両足に全身のエネルギーを収束させ、折り曲げた膝をバネのように思いっきり伸ばすと同時、まるで野球のスライディングキャッチでもするように両足で地面を蹴り飛ばした。第三者から見たら、それは圧倒的身体能力と反射神経があつてこそその動きだっただろう。

（届け ！）

落下する手榴弾が地面にふれる一歩手前、合間に手を滑り込ませた結城がギリギリのところまでそれをキャッチする。勢いに乗った体がステージのセツトに激しく激突するが、今はその痛みにも身をゆだねている暇もない。

倒れたまま、手榴弾を持つ手を思いっきり振りかぶり、全身の力を込めてその腕を振り抜く。

空へと。

そして、次の瞬間。

ドオオオオオオオン！！ という轟音が辺り一面へと響き渡り。上空で爆発した手榴弾は小さな爆炎と激しい暴風を撒き散らして四散した。

思わず両腕で目を覆い、視界をシャットアウトしてしまう。それぐらい強力な衝撃が結城の元まで伝わってきた。

たった一個の手榴弾から巻き起こった爆発に、腕を下ろして辺りを確認するとすでにそこは喧騒に包まれていた。男性も女性も慌てふためき、爆音を聞きつけた野次馬も集まり始めている。大勢の人々が携帯で写真を撮っていたりコソコソと言葉を交わしたりと、大忙しである。

そんな中結城は小さく息を吐き出して、辺りに視線を巡らせる。そして手榴弾の爆発が人々の空気以外に影響を与えていない事を確

認すると、全身から力が抜け、今度こそ思いっきり息を吐き出す事が出来た。

上空に投げて正解だった。

ステージに炎が燃え移っている事もなく、傷を負っている者もおそらくいない。なんとか被害を最小限に食い止める事ができた訳である。

結城は、地面に仰向けで気絶している手榴弾を投げた犯人に対して一瞥して、

「お仕事完了」

ゆっくりと、呟いた。

1：特殊護衛機関『ジェシータ』

特殊護衛機関『ジェシータ』。

ロシア語で『守り』というその名の由来を持つ、世界でも数か所にしかない最高峰の護衛機関。その一つが、日本の東京都に在住する。

ごく一部の政府関係者や大財閥の人間しか知ることの許されない世界の裏事情。その一片を担うのがこの『ジェシータ』。

『ジェシータ』に所属する人間はみな、通常のSPとは違った特殊な訓練と技能を学び、依頼者から前払いの契約金を貰ってその身柄を期間内護衛する。彼らは『ガード』と呼ばれ、護身術とは違った、敵を本当の意味で殺しに掛る近接格闘術。政府によって特別に許された銃器、刃物の持ち歩き、それを使用した特殊な訓練。さらには高度な情報処理能力まで身につけ、依頼者を徹底的に守り抜くのが仕事だ。

政治家の演説中の警護から、総理の外出の際の警護、海外から訪れるVIPの警護まで、その対象は様々。ただ一つ共通して言える事は、その誰もが命を狙われてもおかしくないほどの要人であること。『ガード』はそれらの犯行を幾重にも阻止してきた、政府に絶対的な信頼を寄せられる護衛機関というわけだ。

無論、世界の裏、その一片を担うだけあって『ジェシータ』の存在が公の場に知られる訳にはいかない。たった一つの組織の為に国の税金が莫大に動くことだってしばしば、もしそのような事を国民にでも知られたら国がどうなるか分かったものではないのだ。

そして、17歳。男。諏訪部結城。すわへゆつき

彼もまた、特殊護衛機関『ジェシータ』に身を置くガードの一人だ。

一般的な日本人らしい黒髪に、男性にしては大きめの瞳。少し細めの体の線を持つ彼も、見かけによらずガードとしての十分な技能を身に秘めている一人である。

まだ幼い頃、諸々の事情で両親を亡くした末に結果的に身を置く事になったこの組織。入った当初から肉体の構造を壊すようなおそろしい訓練を毎日のように受けて、未成年にも関わらず銃器の扱いには人一倍慣れている。

まだ学生の身分にも関わらず、すでに命懸けの仕事に没頭している結城はおそらく異常と言えよう。だが結城本人にしてみれば、そんな毎日が当たり前であり、大した苦悩もない。これが彼にとっての日常なのだ。

そんな若くして一人前のガードである諏訪部結城は今、東京新宿にデカデカと鎮座している高層ビル、『ジェシータ』日本支部の廊下を面倒くさげに歩いていた。

彼の向かう先は社長室……なのだが、この建物、相当の面積と高さを誇っているせいで毎度毎度目的の場所へ向かうのにかかなりの時間を要してしまう。しかも『ジェシータ』の日本支部とか言っておきながら、1階から29階までは全く別用途の建物。実際に『ジェシータ』本部となっているのは30階から35階の計5階スペースのみである。世界最高峰がこれなのだから少し哀れだ。

世間的にはあまり知られてはいけない組織なのだからひっそりとしているのも当たり前かもしれないが、もうちょっと豪遊してもいいんじゃないの？ というのが結城の見解である。

「ねえ、綾羽」あやば

結城は隣を歩く少女　自分よりも頭半分ほど小さい背丈と茶髪のポニーテールをする女の子に、口慰めがてら言葉を向けた。
『ん?』と小さく相槌を打ってこちらに視線を投げて掛けてくる少女に、結城は得意げに笑って見せた。

「今日の俺、どうだった?　マジで格好良くなかった?」

「……自信満々のドヤ顔で言ってる所悪いけど、いざって時に通信を切られてあたしはそっちの様子が何一つ分からなかったんだけど」

「……はあ、残念だ。せっかく俺のイカしてる勇士を綾羽に見てもらいたかったのに、通信が切れてしまっただなんてっ!」

「自分で切つといてよく言うわね」

この冗談が言い合える仲の少女、たちはなあやは橘綾羽は結城と同様『ジェシータ』メンバーの一人である。

結城がこの組織に来た当初から仲良く接していて、今では幼馴染みと言い合えるほどの関係。小さい頃からこの組織に身を置いているらしく、サポートメンバーの一員としてガードをバックアップする役割を担っている。

物騒な組織で育まれた幼馴染み関係、というのも実に珍しいものだ。結城や、おそらく綾羽にとっても大して気にするところではないのだけでも。

「……結局、犯人は手榴弾を使ってたんだってね」

唐突に綾羽が話を切り替えた。

犯人の使用した武器　手榴弾。彼女はサポートメンバーとし

て後始末のために現場へ赴いていた。その時に他の誰かから耳にしたのだろう。

「そうそう、そうなんだよ。てつきり拳銃か何かだと思って、斉藤氏には事前に防弾チョッキを着ててもらったんだけど……どうりで犯人の奴、自信満々な犯行予告だったわけだ」

「あのメッセージは警察にかなり挑発的だったものね……」

先の応援演説会。実はその三日前に、犯人の男からと思われる犯行予告のメッセージが警察のほうに届いていたのだ。

結城と綾羽もそのメッセージに一度目を通したことがあるが……あれは酷いメッセージだった。警察に対して悪い思い出でもあるかってぐらい警察のことをコケにした文章を連ねて、斉藤氏の政治界でのやり方が気に食わないのか、斉藤史孝を徹底的に罵倒。拳句の果てには絶対に殺すとまで宣言してあった。

ただまあ、斉藤氏本人が『ジェシータ』に護衛依頼を出したのが犯人にとって最大の失敗だっただろう。ガード一人分の契約金と引き換えに結城が会場に派遣されたせいで、結果的に犯行は失敗。結城としては一言、ざまあ（笑）と言わせてもらおう。

「ざまあ」

「え？」

「いやなんでもない。結局のところあの手榴弾ってどこで手に入れたんだろうな。海外の通販か何かかな？」

「たぶんね。今はネットとそれなりの知識さえあれば何でもできる時代だし。そればかりは犯人の身元を調査してる警察のみぞ知る、

「つて奴だと思っよ」

本人はこう口になっているが、もし彼女が本腰入れて犯人のことを調べればあの男に関する情報という情報を知り尽くすことが可能だろう。

大した身体能力もなければ銃器に関する扱いも慣れていない綾羽が『ジェシータ』に身を置けている最大の理由が、彼女の持つ天才的な情報処理能力とハッキング技術だ。そこらのコンピューターに愛用のノートPCでハッキングを仕掛け、監視カメラの映像を盗み見したり個人情報情報を丸ごと奪い取ったりと様々な用途で『ジェシータ』のガード達をサポートする。

そんな天才ハッカーの綾羽が自分専属のサポートメンバーでいてくれるのだから、結城としてはありがたみを思えなければならぬ。事実、彼女が居なければ成功することのできなかった仕事を過去に何件も経験している。綾羽様々つて奴だ。

「まあ何にせよ、今回も無事に終わって諏訪部さんはご安心ですよ」

「だね」

くどいようだが、『ジェシータ』での仕事は命懸けだ。一瞬の判断が命取りになる。いざとなったら自分の身を挺してまで要人を護るのが結城の役目。

規模の小さい仕事であれ、こうして無事に成功を収めることができただけで十分に名誉なことだ。まあ、名誉と言ってもガードの取った手柄は金になるだけで、世間的には『勇敢な一般人の活躍で』とかの理由がこじつけられて公表される。そのため結城が世界的な有名人！ というレッテルを貼られることはまずあり得ないが。

「ああそつだ、綾羽。今日の晩飯、どこかで外食しないか？ どうせ報酬金も出るんだしさ」

「外食？ んー……」

結城の誘いに『んむむむ』とか難しい顔で唸る綾羽。なぜか意味もなく額に指を当てて考え込むポーズをとっている。

「どうかしたん？」

「いや……食べ物に行く場所によっては結構お金かかるだろうし、今月のスケジュールを……」

……お宅の家計簿はそんなに酷い有様なのでしょうか。

「なに？ そんなに家計厳しいの？」

尋ねるとますます難しい顔になる。

「うち、お父さんがお金遣い荒いから……。先月もタバコと弾薬とパチンコでどれだけのお金を無断に消費させられたか……」

「ああー……」

一人暮らしの結城にその気持ちはよく分からないが、綾羽の父親とは結構な頻度で顔を合わせる。あの人の性格を考えれば何となくだか彼女の苦勞が想像できた。

「別に無理に付き合う必要はないぞ？ 余裕のある日にまた改めてさ」

「それはそうなんだけど……最近は結城と二人で食事することになったから……」

「？ なに、俺と食事することって何か意味あんの？」

「へ？ あ、いや、それはその……」

不意に顔を背け、なぜか恥ずかしそうに薄く頬を染める綾羽。チラチラと横目でこちらの様子を窺ってくる。

しばらくその行為を繰り返して、挙句の果てには『鈍いんだから……』とか恨めしげにボソツと呟いてくる。どういうことだろう？ ただ何となく分かるのは、彼女も外食には行きたいんだろう。結城はしばらく考えると、

「……じゃあ今回は俺の奢りにしよう」

「え？」

「なあに、俺は一人暮らしで金にも余裕があるからね。たまには誰かにメシを奢るってのも悪くないと思ったのよ」

結城の言葉に綾羽はちょっとだけ驚いた様子で目を見開いた。

「……いいの？」

「綾羽がいいのなら」

「……んー……」

お金に困る人はその分お金の大切さが分かる、とよく言われるが綾羽はそれにしつかりと当てはまる一人。誰かに奢られるという行為に多少抵抗があるのだろう。

が、少し考えてすぐに踏ん切りがついたのか、綾羽は小さく微笑んだ。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな。ごちになりますっ」

「あいよ。でも食べに行く場所は安いところで頼むぞー」

「……どうでもいいけど結城って、上げて落したりその逆だったりっていうの多いよね」

「いきなり何の話ですか」

素っ気無い廊下を歩きつつ、どこに行くかとかあこは不味いだとか話しながら目的の社長室へ向かう。

そんなこんなで数分後、二人並んで社長室の前に到着した。社長室といっても大して飾りっ気のない扉に、中もそれっぽい机と書類を溜め込むいくつかの棚、あとは客人用のテーブルとソファしかない。

そもそも社長室自体、『ジェシータ』の総長が業務関連の仕事をするだけの場だ。必要な機能だけを取り揃えたシンプルな部屋であり、それ以上でもそれ以下でもない。

ドアに軽くノックする。が、返事がない。仕方なく結城は中へ呼びかけた。

「総長、入りますよ？」

それでも返事がない。

少々戸惑ったが、容赦なく扉を開けることにした。別にあのおっさんに遠慮したところで何も出ない。

ドアノブを回し、扉を開け放つ。

次の瞬間。

「ユウちゃん！ お父さんが新しいお洋服買ってあげたから着てみてぴょん！！」

……サングラスをかけたスーツのおっさんが、ひらひらのワンピースを持って突撃してきたのでとりあえず扉を閉めた。

「……………」

「……あー、あの？ 結城。お父さんのこと、無視しちゃってもいいの？」

「認めない。あんな奴が父親だなんて、俺は絶対に認めないぞ……………」

と言ってもこのままでは埒が明かない。

一度気持ちを落ち着かせ、念のためにここが社長室であることを確認し、息を吐く。仕方なくもう一度扉を開いた。

すると先程のスーツのおっさんはなぜか床に四つん這いになって両手を突き、涙でも堪えるようにプルプルと震えていた。

おっさんは言う。

「うつ…………うつ…………ひどい！ ユウちゃんったらお父さんの好意を真顔で無視するなんてっ！ これが親離れなの！？ うつつ、そんなの認めたくないっ……………！」

「息子としては主にあんたの趣味を認めたくないよ。ていうか何でいきなり女性物のワンピースなんか持ち出して来るんだよ……」

「もうっ！ 恥ずかしがっちゃって！ さっき言ったでしょう？ お父さんがわざわざ買ってきてあげたに決まってるじゃない！」

「とりあえず精神科に行こうか」

空っぽな頭してるだろ……？ こいつ、40代の男なんだぜ……。真っ黒なサングラスを掛け、同じく黒いスーツ。短い髪をホテルマンのようにアップで固め、一見ヤクザの頭にでも見えそうなこのおっさんこそが、認めたくないものだが特殊護衛機関『ジエシータ』の総長である。

本名は諏訪部正臣。まごおみ……言わずとも分かるだろうが、結城の父親である。

先に釘を刺しておくが、血の繋がる実の父親って訳じゃない。結城の本当の両親は幼い頃に二人とも亡くなった。今ここに居る『親父』は、両親が亡くなった際に結城を引き取ってくれた義理の父親という意味だ。

幼い頃の結城に近接格闘術と銃器・刃物の扱いを教授してきたのもこの人。色々と訳ありだった結城を自分の家族として迎え、わざわざ『ジエシータ』での仕事のため結城を育て上げた過去は彼がよほど寛大な心の持ち主であることを納得させる。

……のだが。

「ほら、ユウちゃんって結構女顔じゃん？ 体も少し細めだし。だから絶対に女装が似合うと思うのよ」

「そのユウちゃんって呼び方やめてくれませんか。それと俺は列記

とした男でして、女顔とか言われるのは不本意……」

「だから照れないのっ！ 騙されたと思って着てみなさいな！」

「……」

年の割りにやたらトーンの高い声で、人の話に耳を貸さず女装をせがんでくる総長の姿はただの変態クソジジイにしか見えない。義理とはいえ、息子としては頭を抱えてしまう家庭的問題だ……。

「ねえ、綾羽ちゃんもそう思うだろう？ ユウちゃんには絶対に女装が似合っつて」

「え？ あ、あたしですか？」

突然話を振られた綾羽が戸惑いがちにあたふたし始める。たぶん苦手なんだろうな、この人との会話……。

まあ、それを言うならこの『ジェシータ』内に苦手じゃない人なんていないと思うけど。

「ま、まあ、確かに結城の顔は、格好いいというより可愛いに部類されると思いますが……目もちよつと大きいですし……」

「そこ！ 真面目に答えないでよろしい！ そんなこと言つてこの人はすぐ調子に乗って……！」

「だよな！ やっぱりそうだよな！ 綾羽ちゃんもそう思うよね！ ほーら見るやっぱユウちゃんには女装の才能がある！ お父さんの目に狂いはなかったー！」

「ほ、ほら見る……。大体あんた、少しは自分の歳を考えろ！ 歳を！」

「見た目は大人。頭脳は、」

「うるさい黙れ！ ああちくしょう、これじゃ全然話が進まないんだけど！」

少しずつカオスと化してきた場の空気の中で、何一つ空気を読まずにぎゃあぎゃあと事態を悪化させていく『ジェシータ』の最高権利者。

今更だが、目の前の親馬鹿が実は物凄く護衛のプロで、とんでもない実力の持ち主だったりすることを誰が信じられよう……。なんだから言っても、一応は組織内トップの人間なのだ。

それから数分、しつこいほどに女装をせがんでくるバカ親父をようやく落着かせる事に成功する。その間実力行使に走った総長が無理矢理に結城の服を剥ぎ取ろうと突撃してきたり、何となくタンスを開いたらワンピース以外の女性物の服が大量に溢れてきたりと大変だったのだが、その辺は割愛しておこう。

「はぁ……。総長、少しは真面目に仕事らしいことをしてくださいよ……」

「パパって呼んでくれなきゃ相手しない」

「もう帰って良いですか？」

「いやーん！ もっとパパに構ってよユウちゃあーんー！」

駄目だコイツ早く何とかしないと。

「というかこれじゃ、いつまで経っても話のサイクルがループするばかりだ……。」

「総長、いい加減に本題へ移りましょうよ」

「ん？ 本題ってなに？」

「ワンピース持ってスタンバイしてるぐらい人のこと待ち構えていたくせしてその言い草かよ！ 少し頭の中クリーニングしてこいよバカ親父！」

「し、仕事の報酬を貰いに来たんですよ。総長」

あとから綾羽が補足を付け加えてくれる。その言葉を聞いてようやく理解したのか、それとも思い出したフリでもしたのか、総長は『あつ、そういえば』みたいな顔で表情を愉快に輝かせ、ポンと手と叩いた。

「そうならそうと最初から言ってくればいいのに。本当にもう、ユウちゃんは怒鳴ってばかりなんだから」

怒鳴らせているご本人に言われると物凄く腹が立つもんなんですね。

結城がこめかみをピクピク震えさせ怒りのパラメーターを踏み留めている中、総長は業務用のデスクの元まで戻ると引き出しを開き、中から『ユウちゃん（ ）』と『橘 綾羽』の名前が記された封筒をそれぞれ1つずつ取り出す。報酬金として依頼主から貰ったお金を、ああいう風に仕分けしておくのも総長の仕事なのだ。

「ほら、これが今回分の給料」

「……明らかに悪意の感じるこの名前には、ツツコミなしの方向性でいいんですね？」

結城と綾羽、互いに封筒を手渡してもらった。封筒の重み的にあまり金額は入っていないのだろうが、せいぜい10万はあるだろう。

綾羽の奴に限ってはさっそく封筒の中身を覗いて目を輝かせている……ただし、10万と言っても実際にブライベートで使えるお金はこの半分も満たない。綾羽のようなサポートメンバーはまた別だろうが、ガードの場合はいざという時のために使用する自分用の銃のお手入れと、新しい弾薬を購入するだけでかなりの金額を犠牲にする。もちろんその行為自体は個人の自由なので別にやらなくても構わないのだが、大事な仕事の最中に『手入れ不足で銃がジャムつてしまい要人を守れませんでした』という言い訳は通用しない。いつでも万全に、些細なことのようにかなり大事なのだ。

「二人とも、今回の仕事は上出来だったぞ。特にユウちゃん。斉藤史孝氏がユウちゃんの活躍をべた褒めしてくれてパパは嬉しい限りだよ」

「そうですか。依頼主が満足してくれていたなら光栄ですよ。それと一人称『パパ』は気持ち悪いからやめてください」

給料のお金を十二分に堪能し終えたのか、綾羽が横から顔を覗かせてくる。

今に限った事じゃないが、こう近くで顔を見るとやっぱり可愛い顔してるよな、こいつ。

「しかし結城は凄いよ。ちょっと前までは訓練続きだったのに、今じゃ一人前のガードだもんね。ハッキングしか取り柄のないあた

しとは大違いだよ」

「それは綾羽がいてこそだよ。そのハッキング能力がなきゃどうにもならなかった仕事は今までにいくらでもあったし、綾羽のサポートにはいつも頼りっぱなしだし。感謝もしてる」

言っと、綾羽は少しだけ頬を上気させて小さく笑みを浮かべた。

「えへへ……そう？　ありがとう」

「まったく、さすがユウちゃん！　女の子に媚びへつらう能力も人一倍なんだから！　パパってば誇らしいっ！」

……そしてこの人は、いつまで経っても頭の中にスポンジが詰まっ
っているらしい。

と、総長は不意にスーツの内ポケットに手をつ突っ込むと、中から一枚の折りたたまれた用紙を取り出す。それを広げつつ、変わらぬ調子で口を開いた。

「で、唐突なんだが……早速、明日から別件の仕事に向かってほしいんだよね。二人が了承してくれるなら、だけど」

本当に唐突な話題変換だが、この人が部下に仕事を回してくるときは大体いつもこんな感じだ。綾羽共々、少しだけ表情が引き締まる。

「どんな仕事ですか？」

「んー、まあとりあえずこいつを見てくれ」

総長は二つ折りにされていたA4用紙を表に向け、結城に向けて差し出してくる。

そいつを受け取り、隣の綾羽と顔を覗かせて文面に目を通した。

「……？　なんですかこれ、ただの個人情報書類ですか？」

用紙に描かれているのは、見覚えのない女性の顔写真と、おそらくその女性のものである名前や年齢、住所に電話番号、あとは個人の履歴などが箇条書きで記されている。

簡単に言っなければその人物の細かい個人情報と過去の履歴が軽く纏められた一枚の紙だ。警察でもまともに扱う事のできない重要なブツだが、『ジェシータ』のような機密機関ならそれを容易に発行することができる。総長本人が必要だと判断し、その手のルートで手に入れた書類なんだろう。

「あっ！」

すると隣から覗いていた綾羽が驚きの表情と共に声を上げた。

「見覚えある顔だと思ったら、この人ヘンリー・マンゼルだ！」

「？　なんだ綾羽、知ってるの？」

「知ってるも何も、海外発端にも関わらず最近日本でも人気の出た有名なアイドル歌手だよ。ていうか結城こそ知らなかったの？　かなり有名なのに」

「うつ……」

普段からあまりテレビや新聞に触れていない結城としてはそう言

われても困ってしまう。そもそも、アイドルだの何だのつてのに興味を持っていないのが最大の要因だと思う。

改めて書類の文面に目を通してみた。

名前はヘンリー・マンゼル。女性。年齢は24。当たり前だが未婚だ。外人らしく作りの細い顔の輪郭に、白い肌。透き通るようなライトブルーの瞳が似合う、ウェーブがかった金髪の女性。なんて言うか、初見なら誰しも彼女のことを『美女』だと評するだろう。それくらい綺麗な顔立ちをしている。

学生時代の頃から音楽、俳優関連の専門校へ通っていたらしく、大学を出てすぐにアイドル事務所へ就職。他二人のアイドルとユニットを組み、当初は人気の乏しいグループとして活動していたらしい。が、その数年後、ユニット内の彼女だけが爆発的に人気を獲得し、今では個人のアイドル歌手として出身のアメリカを中心に活動中だそうだ。

それらの人気は現在、アメリカ以外の海外にも浸透中であり、綾羽の口ぶりから察するに日本でもそれなりに有名なんだろう。

結城は書類から顔を上げると、眉をひそめつつ総長に訊ねた。

「……それで、この人が何か仕事に関係が？」

「うむ」 総長の頷きは早い。「要点を先に述べれば、先日そのヘンリー・マンゼルからウチ宛に依頼が届いた。明日の午後に開かれる特別コンサートで我々に警護を頼みたいそうだ」

「警護……？ でもこの人、海外にいるんですよね？」

まあ当たり前前の疑問だ。

いくら『ジェシータ』の特別権限を振るっても、今から海外へ飛び立ってアメリカに上陸、そこから彼女の元へ向かい依頼を遂行するというのは多少無理がある。

しかしその不可解な疑問に答えたのは、以外にも隣で話を聞く綾羽だった。

「結城ってホントにそういうのは何も知らないんだね……」

「え、え？」

綾羽は呆れたように一度息を吐くと、

「昨日……あれ、一昨日だったかな？ まあどっちでもいいや。このヘンリー＝マンゼルがコンサートを開くために、わざわざ日本に来てるんだよ。ニュースで大々的に取り上げられてたじゃない」

「……お生憎様、そういう世間的な事には乏しい諏訪部さんでありまして」

「はあ……確かに結城の仕事柄、そういうのは別に詳しくなくても大した障害にはならないんだろうけど……。まさかウチに仕事を依頼してくると思っただけだったなあ」

「じゃあ綾羽の役職的には必要なのか？ というどうでもいい疑問は今置いて。」「

「って事は、要するにそのコンサート中、彼女の護衛につけば良いわけですよ？ でもなんで俺達に？」

まあ、当然の疑問だろう。秘密裏の『ジェシータ』だって人手が過疎っているわけではない。別に結城らに頼まなかったって、もっと暇してるガードの連中はいらんじゃないのだろうか。

よりにもよって今日仕事が終わった結城と綾羽に、明日決行の仕

事を頼むことはないと思う。総長はそもそも自分の部下にそういう無理を強いるタイプではないのだし。

当の総長は結城のそんな疑問を事前に分かっていたようにスラスラと答える。

「ヘンリー」マンゼルから依頼の電話をもらったのが不自然なくらい急すぎてな……。あまりに突然すぎて他のガードがほとんど出払っているんだ。明日から完全にフリーってのが二人しかいないんだよ」

「突然って……いつ連絡がきたんですか？」

「今朝」

確かに突然だ。

「……それは急すぎますね。そのコンサート中に何かやましいことでもあるんでしょうかね？」

「さあ、そこまでは分らん」 総長は黒光りするサングラスを軽く掛け直しつつ、「ただ、私達の仕事は依頼者の身柄を徹底的に守り抜くことだ。彼女に依頼を申し込まれ、契約金を受け取ったからにはうだうだ言ってられん。仕事は仕事だからな」

「はあ……」

曖昧な返事を残しつつ、手元にあるヘンリー「マンゼル」の個人情報書類をぼんやり眺める。

別に仕事を断る気は無い。

少し気分が乗らないところもあるが、だからと言って仕事を疎か

にするほど結城も体たらくではない。隣の綾羽も同じだろう。何も断りの言葉を口にしないからには仕事を請ける気にいるんだと思う。むしろ彼女に関しては、超有名アイドル歌手に会えるって時点で多少瞳が輝いている気がする。

「ま、肩を軽くして護衛に当たればいいさ。二人の他にも応援で一人その護衛に当たることになってる。そう気負うことはない」

「了解」

総長がああ言ってるんだ、たぶんそこまでキツイ仕事ではないのだろう。

何も言わないということは、今日の斉藤史孝氏のように殺人予告があつたわけでもなければ、何らかの危機に瀕しているわけでもない。単純に依頼主の安全保護のために雇われた仕事だ。何も起こらない事を祈りつつほどほどに警護に当たればいいだろう。

綾羽が肩をつんつんと叩いてくる。振り向くと、彼女は胸の前で小さくガッツポーズを作って見せた。

「結城、がんばろうねっ」

「おう。無理しすぎない程度にな」

綾羽はどうもやる気に溢れているらしい。そんなにこのヘンリー・マンゼルとやらに会えるのが楽しみなのかね。

総長は二人の様子に満足げにうんうんと頷くと、

「とにかく今日はお疲れ様。二人ともよく頑張ったぞ。明日までゆっくり体を休めとくんだぞ」

「はい。じゃあ失礼します」

「総長もお疲れ様ですー」

礼儀として軽く挨拶を残して、綾羽と社長室をあとするべく総長に背を向けた。
が、

「ああそうだ、ユウちゃんユウちゃん。最後に一つだけ頼みたいことがあったんだ」

まだ何かあるのか、と足を止めて首だけで後ろに振り向くと、総長はガバツ！！！！ というとんでもない猛スピードで懷から何かを取り出した。

それはとても長く綺麗な黒髪で、生え際らしき中心点から流れるように垂れ下がっている、まるでカツラのような……、

「女物の服が駄目ならせめてウィッグを被ってくれとパパはすごく嬉しいかもッ！！」

「人に休ませる気さらさらないだろデメエ！！」

夜の東京は、その景色だけでも神秘的なものになる。

空は青黒く染まり浮遊する雲の輪郭すらも分からぬほど淀んでいくにも関わらず、地上では高層ビルや数多くの建物によって色とりどりに光り輝き、車道を走り抜ける多くの車と道行く道を行く人々で街はにぎわいに溢れる。

だからこそ日本最大の都会であり、東京都らしさなのだろう。それらが全て人工で作られ自然を破壊したものであっても、これにはこれでしか手に入れることの出来ない別種の神秘というものが隠されているのだ。

そんな中、とある小さなビルの屋上。

無骨なコンクリートの地面を踏みしめるように、街の中心に二つの人影が浮かび上がっていた。

そこからは明らかに周囲の空気にぞぐわない、異様な雰囲気が出ワジワと漏れ出している。何か、とは言えない。まるでその一点のみ別次元のように、そこだけが異世界を作り出しているように、周りの空気を喰い殺しながらその場に君臨する。

「明日だっけ？」

なだらかな風に長い黒髪を揺らす小柄な少女が、夜の街並みを見下ろしながら口を開く。

車のエンジン音や風の産声に掻き消されそうなその小さな音を、しかし隣に立つ長身の男は一字一句聞き逃すことなく聞き入れた。

「ああ、間違いないよ。明日の昼過ぎ、近くの葛西臨海公園という場所で標的のコンサートが開かれるはずだ」

男の声はやわらかい。だけどその裏には、しっかりとした鋭い芯と自己主張が見え隠れしており、少女の耳までハキハキと言葉が届いてくる。

「その時が、もっとも狙いやすいタイミングってこと？」

「みたいだね。依頼主から共に提供された情報でしかないけど、確証が取れている。ソースも確実だ。間違いはないだろう」

聞き入れた少女は小さく頷き、しばらく自身の意識をおぼろげに漂わせる。

そして今ここにきた理由と、自分のやるべき事。それらを照らし合わせ、浮遊させ拡散させた意識と目的とを改めて固定した。

「迷いはないかい？」 隣に立つ男がさりげなく口にする。「キミはまだ若い。確か『この類』の依頼をこなすのも今回が初めてだろう？ 本当は辛いんじゃないのか？」

男の言葉に、僅かながら考えさせられるところはあった。

迷いがなく聞かれれば無きにしも非ず、自分にはまだ早いんじゃないのかとか、どう理屈を並べたって残酷なことに変わりはない。だけど自分から名乗りを上げ、しっかりと引き受けたからにはそれを全うする義務がある。

今更退く訳にはいかない。

「……大丈夫。私だってもう素人じゃない。他のみんなに合わせるのは当たり前だから」

「そうかい？ だけど……」

「大丈夫」

少し強調して男の言葉を制止する。それはまるで自分自身にも向

けられているような気さえ覚えさせた。

少女の言葉に何かを受け取ったのか、それ以上男が少女の心配を口にすることはなかった。

夜の街並みへ降ろす視線を一度離し、上空へと視線を注ぐ。街からの降り上がる光のせい、星も、月も見えずに相変わらず真つ暗な夜空が東京都の真上に鎮座していた。それを忌々しく思うわけでもなければ歓迎するわけでもなく、少女は無心でじっと視線を送り続ける。

そして、一言。少女は口にする。

自分たちが狙う標的の名を。あらゆる迷いを取り除いて、やるべき事柄を脳内で形成し直すように、『殺すべき』相手の名を。

「ヘンリー＝マンゼル……」

一つの世界には、何十、何百、何万、何億もの『線』が世界の振興と共に一つ一つの道を辿っていく。

それらは本来、互いが交わることがなく、平行した道を進むことによって自分自身を成長させ、いずれ孤独に消えていく。

だが、ごく稀に。

本来交わることのない、交わるべきではない二つの『線』が交差し、世界の均衡を揺らすことがある。それはどこにでもありそうで何気ない現象の一つだったとしても、確かな意味をその中枢に秘めている。

これは、未だ何も知らない少年と少女。
何とも交わらない二つの『線』が、屈折し、互いの道に干渉する。
たったそれだけの物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8586z/>

ジェシータの楯

2011年12月27日00時53分発行